

会 長 講 演

社会が求める看護師像

Nurse Image that Society Requests

石井 トク Toku Ishii (日本赤十字北海道看護大学)

キーワード：看護師、品格、反省的实践家
key words : nurse, dignity, reflective practitioner

はじめに

社会が求める「看護師像」は、優しさと思いやりがあり、そして信頼できる人である。人は病むと誰もが不安に押し潰され、平常心を失う。それを全面的に受け入れることができる人の根幹が品性であり、品格である。品性は日常の生活のありようを通して身につくものであるが、専門職としての品格を持つには教育が必要である。特に、看護職に専門職として人々の健康を担う役割が期待されている今世紀だからこそ、品格について考えることに意義があると考え。そこで、本学術集会のメインテーマを「看護師の品格を考える」とした。

本来、会長講演はメインテーマに対する基調講演としての内容でなければならないことは充分認識していたが、ここに至ってわが身の能力の限界を知るはめになった。幸い、小玉香津子教授の特別講演（古いは新しい、新しいは古い～フロレンス・ナイチンゲールの品格～）、松田一郎教授の教育講演（品格ある看護師像を求めて～日本の生命倫理を考える～）は、看護師の品格とケアの核心にせまるものであり、私の拙い内容を補充していただいた。

Ⅰ. 看護師は、なぜ、品格が必要なのか

「優しさだけでは看護ができない」というのが、長年の私の持論である。安易に対象を『理解した』というが、他人の内面を正しく理解することは難しく、不可能に近いことをまず認識する必要がある。患者を理解しようとする思いやりの姿勢と理解に近づくための

努力が看護師には必要であり、共感できる感性を磨くことによって、相手の気持ちに近づくことができる（図1）。

昨今の脳科学、情報科学の進展によって、相手の気持ちに共感する前頭葉神経細胞のミラー・ニューロンの存在があきらかになっている。他者の意図を理解するためには、共感することが必要である。意識、無意識にかかわらず、根底に共通する環境、文化の影響を受け、日本人の感性、生命観を既に共有していることは、共感の手掛りとして大きな要素となる。

日本の生命のパラダイムは心身一体である。自然に対する畏敬の念を語る場合でも、西洋文化では湖に竜が宿るといった感覚であるが、日本においては、河、山のすべてが生きているという自然との一体感がある。また、日常的に用いる言葉の「もったいない」は、単なる儉約精神ではなく、「もったい（勿体・物体）」とは、

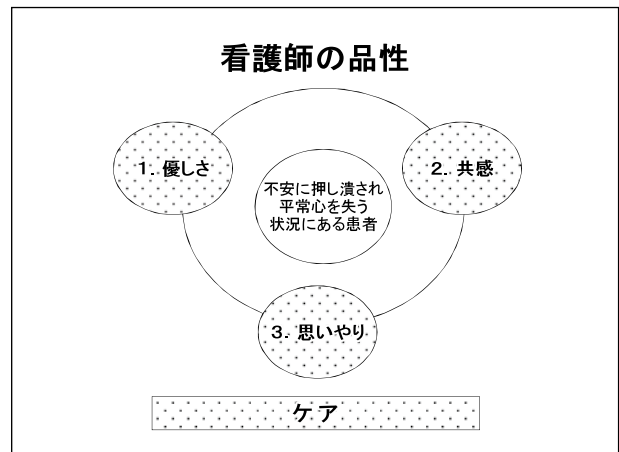


図 1

そのものが本来持っている価値を意味している。本来の価値を尊重する感性は、モノにも「命」を認める生命観である（図2）。

食事前、「いただきます」と軽く一礼し、食後に「ごちそうさまでした」と言うことは、食材の命への礼であると共に、食を支える農民、漁師、そして食卓を共にする家族らに対する感謝の気持ちの表れでもある。さらに日本固有の「型」と「間」は、人としての道（倫理）に通じる（図3）。あらためてみれば私たちの日々の生活は、日本文化の「型」を伝承している。座敷での立ち居振る舞い、座り方、作法での華道は、「天」と「地」と「人」を表し、三角形のバランスが基本である。四季折々の草花の性質と色彩の調和は、人間の能力を引き出す教育にも通じるものである。自然に育まれた生命観は、私たちの心の中に生き続けている。「日本の合理性」は、欧米人の「近代合理主義」に比べて、人の気持ちを考え、周囲の人に対する気遣うことができる思いやりがある。「おもいやり」こそが品性である。

身についた品性と看護の科学的コミュニケーションスキルが融合した看護を提供されることで、患者は、安心して「身を任す」までの信頼関係を築くことがで

共感と日本的感性

日本の生命観のパラダイムは心身一体

1. 山河大地・モノに命を認める
2. 他者の「もったい」を尊重
「もったい」は、そのものが本来もっている価値観を意味する

あいての（もったい）がまっとうされていないことを
悲しむ気持ち、あいてのいのちを大切に思う気持ち

岡田真美子 日本の感性：「もったいない」感性哲学

図2

道

華道・歌道・茶道・書道・香道・剣道・柔道・弓道...

所作や運動も「道」を極めると芸術に昇華される。
芸術のなかに日本の精神が織り込まれている。
「道」を通して品性と人格が養われる。

図3

きる。コミュニケーション力は、説明力でもあり、相手の心を推理・考える論理的思考能力でもある。修練によって品格ある看護師となることができると考える。

Ⅱ. 感動は、倫理的感性の証し

人は感動することで人生を豊かにし、それは生きる原動力となる。2007年11月の赤十字国際会議で採択された国際赤十字運動の標語である「Together for humanity」を日本の翻訳者は「人間を救うのは、人間だ」とした。この標語は人々の心を動かし感動させている（図4）。訳者の感性に日本人特有な「ケア」の本質をみることができる。

高橋（2008）は、「ケアとは援助を必要とする人が発する要求に対して、援助者が熟慮をもって応え、その応答が援助を必要とする人に受容されるときに成立する関係、あるいは相互行為である。この場合、熟慮をもって行うことには、援助や世話といった積極的に相手に働きかける行為だけでなく、相手をそっとしておくこと、相手の言葉にじっと耳を傾けること、たんにそばに寄り添っていること、忘れずにいることといった種々の気遣いも含まれている」と述べている。

つまり、相手の意向を汲まない独りよがりで一方向的な行為ではなく、相手の呼びかけに応え、相手を思いやりながら進める双方向な行為こそがケアであるといえる。さらに、相手の状態をよく観察・アセスメントし、必要な援助と最善な看護方法を選択できる能力が必要である。

Ⅲ. マイナーな専門性からの脱却

科学・医療技術の急速な進展によって、医療の不確実性、多様性、複雑性、多様な価値観など、患者及び家族が直面する課題はさらに多くなり、対応の困難性も高まってきている。したがって、画一的な看護を行

国際赤十字運動標語

“Together for Humanity”
(2007年の赤十字国際会議で採択)

「人間を救うのは、人間だ」

机上論ではなく、あらゆる人道・救援活動の経験を通して、生きてくる言葉です。
近年、地球環境に伴う気候変動によって国内外で自然災害が増加しています。
これに対して人為災害があります。また、テロ等による災害もあります。
つきつめてみれば、すべて人間が生み出したものです。
人間はおろかな動物ですが、それを救うのは、人間の英知です。
(石井解釈)

図4

うのではなく、患者個々の問題に即した「オーダーメイドケア（その人にあった看護方法を意味する石井の造語）」でなければならない。つまり、メジャーな専門職（profession）にならなければならない（図5）。

Donald Schön（1983/2003）は、有能な看護師の看護行為は、すでに「技術的合理性」の原理の枠を超えた実践をしていると述べている。技術的合理性に基づくマイナーな「技術的熟練者」から「行為の中の省察」に基づく「反省的实践家」としての看護職の専門性を説明している。

つまり、病苦を抱えた患者、家族の諸問題において、看護は、「状況との対話」による実践的認識論に基づいた対応をしており、患者と共に本質的でより複合的な問題に立ち向かう実践をしていると指摘している。専門家像は「行為の中の省察」と概念化される実践的認識論を専門家の中核ととらえ、かつ、専門家の実践を支える高度な「専門的技法」を解明すれば、「看護」の役割と責任を明確にすることができることを示唆している。具体的な展開方法を次に示す。

専門家の専門性とは、看護実践過程における「知」と「省察」にある。それ自体にある「知」を捉えるための鍵は次の3つである。①行為の中の知（無意識の

知、暗黙の知）。②行為の中の省察（看護行為の流れの中で瞬時に生じては消え行く束の間の探求と思考）、看護行為の過程のなかでの思考にこそ、専門家としての実践的思考の特徴がある。③状況との対話。ある状況の中で関わる対象に対し、何らかの驚き、不確かさを感じる事が鍵である（図6）。

さらに、暗黙の知を知る手順は「自分がしていることについて、行為の中で暗黙に知っていることをふりかえる」ことである。次のようなことから認識に至る。①私はどの特徴に気づいたのか。②私がこの判断をする基準は何だったのか。③私がこの技能を行う時に、どんな手順で実際にやっていたのか。④私が解こうとした問題に対し、私はどのような枠組みを与えていたのか（図7）。

自らの看護体験を振り返り、暗黙知を知り、自己点検評価を試みてほしい。

おわりに

－特定専門看護師によるケアとケアの融合から－

疾病構造の変化に伴い看護の重要性が認識され、「ケアからケアへ」が重要な医療の標語として定着している。ケアでは、看護の本質である人の弱さ、もろさ、痛み等を有する病者に対する共感、思いやり、優しさ、そして昨今よく聞かれる「よりそい」が頻繁に用いられている。言葉ばかりが独り歩きしている感のある「よりそい」だが、傍にいることだけが「よりそい」ではなく、相手に常に関心を持ち、気遣っていることを伝える（言葉だけではなく、態度で示す）ことも「よりそい」である。ケアは看護の原則であり倫理でもある。日本の文化思想と合致した寄り添いを行うためには、ケアをするもの、ケアをされるものがお互いを尊重する人間関係が重要である。思いやりの姿勢（倫理的態度）を礎に、コミュニケーションと確かな看護実践が付加されることで、看護師に対する信頼関係が生まれるはずである（図8）。

マイナーな専門性からの脱却

メジャーな専門性: 人々が納得する明白な目的によって学問的に原理付けられ、安定した制度的な文脈において機能している科学的知識の典型となる、体系的で、基本的な知識に根拠。

マイナーな専門性: 変わりやすい曖昧な目的であり、実践では不安定で制度的文脈にわずらわされている。

図5

－専門者像－ 反省的实践者

専門家の専門性とは看護実践過程における「知」と「省察」にある
それ自体にある「知」を捉えるための鍵

- ①行為の中の知（無意識の知、暗黙の知）
- ②行為の中の省察（看護行為の流れの中で瞬時に生じては消え行く束の間の探求と思考）、看護行為の過程のなかでの思考にこそ、専門家としての実践的思考の特徴がある。
- ③状況との対話
ある状況の中で関わる対象に対し、何らかの驚き、不確かさを感じる事が鍵である。

(Donald Schön)

図6

反省的实践家の暗黙知

「自分がしていることについて、
行為の中で暗黙に知っていることをふりかえる」

認識したとき

1. 私はどの特徴に気づいたのか
2. 私がこの判断をする基準は何だったのか
3. 私がこの技能を行う時に、どんな手順で実際にやっていたのか
4. 私が解こうとした問題に対し、私はどのような枠組みを与えていたのか

図7

そこで、特定専門看護師の定義（案）にあるケア（care）とキュア（cure）の融合に注目した（図9）。

1992年より、私は看護師の法的業務を4つに区分して説明している。医師の独占業務である絶対的医行為

と、看護師の独占業務である絶対的看護行為、さらに、融合している相対医行為（キュア）と相対的看護行為（ケア）である（図10）。特に重要なのが相対的看護行為であり、従来からこの行為を「有能な看護師」や「ベテラン看護師」が担ってきた。特定看護師の担う役割は「融合領域」の深化である。看護師が「有能」や「ベテラン」といった曖昧さから脱却し、真のプロフェッショナルとなるためには、特に相対的な看護行為を明確にすることが肝要である。その一つの手法として、ショーン(Schön)の反省的実践が手掛りとなると考える。

文献

高橋隆雄（2008）. 生命・環境・ケア－日本の生命倫理の可能性－. 福岡：九州大学出版会.
 Schön, D.A. (1983) / 佐藤学, 秋田喜代美 (2003). 専門家の知恵－反省的実践家は行為しながら考える－. 東京：ゆみる出版.

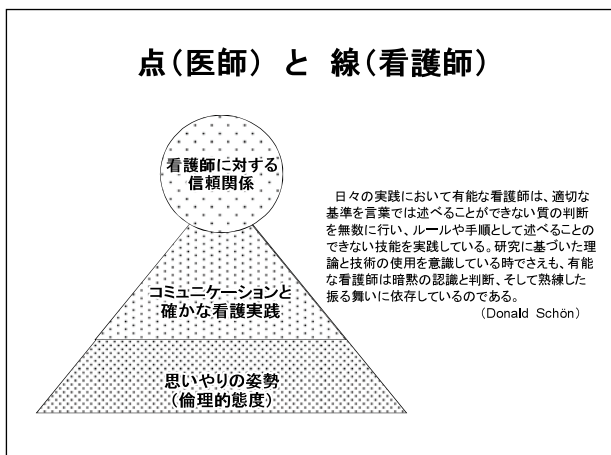


図8

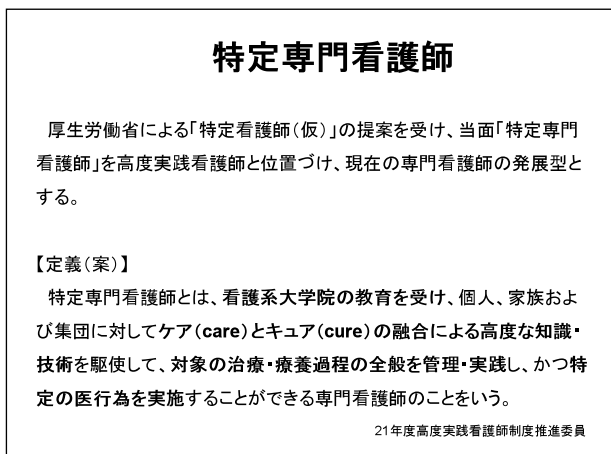


図9

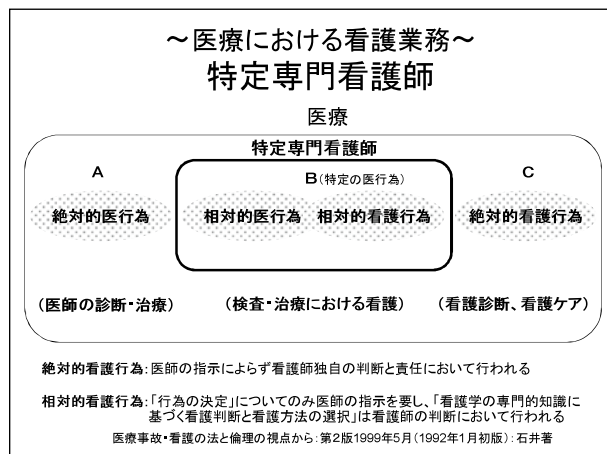


図10